
記憶のカケラ～過去・現在真実はどちらなのか～

コーベ－コーベ－

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

記憶のカケラ〜過去・現在・未来はどちらなのか〜

【Nコード】

N6342D

【作者名】

コーベコーベ

【あらすじ】

藍那は7年前に出会った彼を忘れられずにいた。そんなとき藍那は通り魔に背中を刺され気を失ってしまう。気がつくときは7年前の彼と出会った場所だった。しかしそこで自分の過去の思い出と今いる7年前の現在との矛盾に気付く。過去を信じるか現在を信じるか、未来はどちらなのか。そして彼は何者なのか…

第一章

いつかまた、彼に会えるだろうか…今どんなに願っても報われな
い思いのような気がするけれど、…どうか…この記憶がなくなる前
に…もう一度願いたい…彼に…会いたい…
私藍那は今18歳、高校ではまじめに過ごすも頭は悪くて見た目も
まあまあ程度、スタイルも良い訳でもなく目立つわけでもなく過こ
してきた。

しかし男受けが悪いわけでもなくて何人かの男には告白されたり
はしていたが全て断っていて男と付き合ったことはなかった。

「藍那はさあ、なんで男と付き合わないの？せつかくよってくる
やついるんだから付き合ってみたら良いじゃん」友人の智が意味分
からんという顔をしながら言う。智ははつきりとした性格の持ち主
ですぐに思った事を言う藍那の友人だった。

「でも私、好きな人いるし…」

「だからそいつは藍那が小5の時出会った人でしょ、しかも病院で
もう死んでんかもじゃん。現実みたら諦めたが良くない？」

「そうかなあ…でめまだ好きだし、また会えるかもって思っちゃう
んだよね」

「まあ好きにしたら良いけど名前も顔もなにも覚えてないんでしょ、
早く忘れなよ。じゃあ私そろそろ帰るわ。明日で学校最後だし卒
業式遅刻しないでよね、また明日。」

「おやすみ智」

「ただいまあ」智が家に帰るやいなや母親が慌てて話しかけてきた。
「あんた今日はひとり帰ってきたの？」

「藍那と帰ってきたよ、何慌ててんの？」

「今警察から電話で藍那ちゃんが帰ってたら後ろから誰かに刺され
たって電話が…あつて…あんた誰かみてないかって…」母は床に

座りこみ

「あんたが刺れなくて良かった…」涙をためて安堵している。

「見てないけど…藍那は、大丈夫なの？何処の病院なの」さっきまで一緒に恋いバナをしていたなんて想像出来ない現実が智を襲っていた。すぐ病院に行き藍那の姿を探すと集中治療室に横たわる変わりはてた藍那がいた。ガラス越しにしか藍那をみることしか出来ない藍那の母親が

「藍那こつちをみて」と泣いている。智は藍那の母親の手をにぎり「おばちゃん…」励ましたかったがそれ以上の言葉が見つからず涙が頬を伝った。

「藍那…」

その時だった藍那が目を開いたのだ。みんなが驚いて藍那に呼び掛ける。すると藍那は小さい声で

「彼だったの…間違いない…彼が私の所に…」そういつとまた目を閉じてしまった。みんなが涙を流し床にくづれおちた。

「彼って誰のこと、藍那…まさか…」智は今日藍那と話した忘れられない彼を思い出していた。

どれくらい眠っていたのだろう。この体のたるさはたまらない。

「ん…んん…」誰かの声がする

「大丈夫？」…

「看護師さん呼ぼうか」目が覚めた、

「あ大丈夫そうだね、良かった。うなされてたよ大丈夫？」17歳か16歳位だろうか同い年か、少し年下の男のこが話しかけてきた。

「大丈夫…ありがとう。」藍那は彼の顔を見るなり思った彼に似ている…？でも藍那の好きな彼は藍那より五つは年上だった気がしたため彼だとは結び付けなかった。頭がぼーっとしている。私なんて病院で寝てるんだらうそしてこの病院は彼に出会った病院に似ている。

「じゃあ俺はこれから検査だから」と彼は部屋を出ていった。ぼつと部屋から窓を見ながら頭の整理をしていた。明日は卒業式だったよね、なんで病院にいるんだろう…すると

「ミンミンミンミン」と蝉の声がし、焦って鏡を探した。

「なんで三月に蝉がいるのよ…」鏡をみて驚いたそこには11歳の藍那がいた。

「え…私…なんで…じゃあさっきの彼は…」藍那は廊下を出て探したがそこに彼はもういなかった。しかしこの廊下、看護師さんたちに見覚えがあり間違いなかった。「私…今…11歳のあの頃にいるんだわ」藍那は不安と驚きとそして彼が近くにいるという気持ちでいっぱいになった。

「彼に会える…私彼に会える」

その頃智はまだ眠り続けている藍那を見つめていた。藍那の体調は落ち着き、普通の病室に移動されていた。

「藍那…彼ってあなたが好きなあいつなの？そうなのよね。」返事を返す事の出来ない藍那に智は何度も声をかけていた。しかし智には絶対に藍那が最後に言った彼は小5の時に出会った彼に間違いなという自信があった。

「だって藍那が彼なんて呼び方する男はあいつくらいいたもんね。…でもなんで藍那を刺したりしたのよ…」藍那の話しによれば闘病生活を2人で励ましあって耐え抜いて、藍那が先に退院が決まって別れが淋しくて泣いていたら

「俺が元気になったら会いに行くよ、また一緒に遊ぼうな」と言ってくれて別れたとのことなのに、いったいなぜ藍那を…その時だった。

「智、藍那ちゃんを刺した犯人つかまったわよ。」と病室に駆け込んできて母が叫んだ。

「犯人は…誰だったの。藍那の事昔から知ってる人でしょ」

「それが…藍那ちゃんの事なんて知らないって、誰か刺したかった

だけで丁度目の前にいたからだつて。もうお母さん藍那ちゃんが可哀相で」

母は泣きながらに訴えた。しかし智にはその人ではないきがした

「……お母さんその人何歳？」

「え？そうね、40歳位かしら」

智はそれを聞いて

「違う…犯人はその人じゃ…その人犯人じゃないよ」

「でも警察が決めた事だから確かよ。もう大丈夫よ藍那ちゃん。」

母は眠っている藍那の顔を撫でながら笑顔で喜んでいる。しかし智にはそんなこと信じられず

「母さんその犯人の連れて行かれた警察所の場所教えて」

智は自分の目で確かめに行く覚悟を決めた。

その頃藍那は過去の自分を鏡で見ている。

「私はこんなに体調の悪そうな表情していたのね…」

目にはくまが出来ていて唇は青くチアノーゼが出来ている。腕をみると痩せていて骨が目立つほどがりがりに痩せていた。小学生だった昔の頃は見た目など対して気にしていなかったため解らなかったのだ。

鏡をじつとみているとノックする音がした。

「あ…はい。」慌てて返事をするとなースのひとりが病室に入ってきた。「藍那ちゃん今日はベッドから起き上がって大丈夫なの？」

「はい、お陰様で大丈夫です。」

「それは良かった。調子が良いなら少し外へ散歩にでも行かない？看護師さんの胸元をみると都築とかいてある。」

そつえばいつも都築看護師さんが私のお世話をしてくれていた事を思い出し懐かく感じた。

「藍那ちゃん、お散歩行ってみようか。」

「はい、お願いします。」

車椅子を押してもらい外を散歩しながら都築看護師さんが楽しそうに話しをしてくれていた。しかし藍那の頭は彼でいっぱい外の景色から彼を探していた。しかし何処を見渡しても彼はおらず藍那はがっかりしていた。

その時目の前で杖をつきながら点滴のスタンドを持っていかにもあぶなつかしいおじいさんが目の前を通った。

「あらやだ、おじいさんたら、ひとり歩きは止めてって言うてるのに。藍那ちゃん少しここで待っててね。」 藍那がぼーっと空をみていると、

「空が好きなの？」聞きおぼえのある男性の声がした。

声の聞こえる側に振り向くとそこには会いたいと思いつけた彼がそこにいたのだった。「あ、……はい。」藍那は照れてしまった事と嬉しいあまりになかなかうまく話す事が出来なくて簡単な言葉で終わってしまった。

「俺も好きだよ空、綺麗だよね。雲の沢山あるときの晴れた空が一番好きだな。」

男はそういうと藍那の横に座った。

「あ、あのさつきは病室で心配してくださってありがとうございます。私、藍那って言います。」

藍那が挨拶をすると男は藍那の方を向いて笑顔で答えた。

「元気そうでほっとしたよ、俺は宏。宜しくね藍那ちゃん。」しばらく2人で他愛のない話しをしていると宏から

「藍那ちゃんは何処が悪くて入院しているの？」と質問がきた。

「…心臓です。」今の体は11歳なのでまだ病気を持っているが、藍那の心は18歳。とうに心臓移植をし闘病生活を抜けだし普通の生活をずっと送ってきていたためとてもそう答えるには違和感があった。

「そっか…それは辛いね。頑張つて病気に勝たなくちゃね。」宏は笑顔で藍那にエールをくれた。

「宏さんは、何の病気で入院しているの？」

「俺？俺はただの盲腸だよ、後四日で退院かな。」

藍那は戸惑った。おかしい。藍那の記憶では、藍那が先に退院して彼が元気になつたら会いに行くつて言つたはずだった。

藍那が自分の今まで思つていた記憶と今起きていることの矛盾に戸惑っている間、少しの沈黙が続いていた。そのことを藍那が淋しい思いをしていると思つたのか宏が口を開いた。

「藍那ちゃんは毎日外に出られる訳ではないの？体調の良い時だけ？」

「あ…はい。毎日はいれません。」

「そうなんだ…じゃあ明日から俺退院するまで毎日部屋に遊びに行くよ。」

「え…」

「約束するよ、ほら。」

宏が笑顔で手出してきた藍那も嬉しくて手をだし指切りを交わした。都築看護師さんに車椅子を押されながら藍那は自分の思つていた記憶との矛盾に悩んでいた。記憶が間違つていたのか…それとも今のこの時がただの夢なのか…藍那は今なぜここにいるのか悩んでいた。

その頃智は、警察所の前にいた。警察所の中に入り誰に話しかけたら良いのか迷っている、ひとりの警察官が話しかけてきた。

「なにか用かね…」その警察官はとても恐ろしい顔立ちで、警察官と言うよりも極道の方が似合う感じがした。しかし笑顔はとても優しくそれで話しかけやすい印象の方だった。

「私、智と言うものです。今日起きた事件の事で話しがあつてきました。」智は悪戯と勘違いされないう、そして怯えている自分に負けないように強く主張した。「どの事件の事だね？」

警察官もまさかこんな少女が事件について話にひとりで来るとはと思ひもせず驚いていた。

「藍那の事件で。あの通り魔が後ろから藍那を刺した事件の事で、私藍那の友人で、いつも一緒に帰っているものです。」

「あゝさつき私が君のお母さんに、君達が一緒に帰っている時になにか変な人がいなかったか尋ねてもらえないかお願いしたからそのことを伝えに来てくれたのかな。そのことなら大丈夫だよ、さつき犯人は…」警察官が言い終わる前に智が話しを止め話し始めた。

「違うんです。そのことは本当に変な人はいなかったです。私が言いたいののは、さつきつかまつた犯人にどうしても聞きたい事があって、犯人が私には彼では無いようにしか思えないんです。だって藍那は…」次は警察官が藍那の話しを止めた。

「智さんだったかな。こんな玄関口でこんな話しはちょっと回りに筒抜けだから、詳しく教えてもらえないかな、とりあえず奥の部屋に行こう。」智はとりあえず警察官が自分の話しを聞いてくれることに一安心だった。

「はい。宜しくお願いします。」智はそううなり自分の拳を強く握り自分の思いをどうにかしてでもこの警察官に伝えなければと思っただった。

第一章（後書き）

読みにくくてすみません

真実

智は刑事と向かい合ってテーブルに座っていた。

「コーヒーは飲めるかな？」

刑事の優しい声がし智は緊張から少しは落ち着きをとりもどしていた。「はい。大丈夫です、ありがとうございます。」

刑事はにこつと微笑み暑いから気をつけるようにとコーヒーを智に渡した。

少しコーヒーを飲んだ頃刑事から

「少しは落ち着いたかな？」

と微笑みかけられた。

「はい。」

「じゃあさつき言っていた事を聞かせてもらえるかな？なぜ犯人が彼ではないと思うのか…」刑事の目が変わった。肘を机について手の平をあわせ智をじつと見つめている。

智はこれでは取り調べを受けているようだと思いながら深呼吸をし、話した。

「私達はいつも一緒にいました。藍那は7年前に入院していた頃気になっていた彼がいて彼を忘れられないといつも言っていました。他の男性なんかには興味なんかなくて付き合った事ありません。そして私が病室行った時少しだけ藍那が目覚ましてこう言ったんです。『彼がいたの』って。藍那が彼つて言うのは7年前の彼いなんです。」

少しの沈黙が続いたあと刑事が口を開いた。

「だから犯人は彼だと…言いたいのかな？」

刑事はじつと智を見つめている。

智もだんだん自信を失ってきた。

「はい…」

「その彼が今の容疑者とは考えられないのかな？」

「それは有り得ません、藍那と五つ位しか年は離れていないはずだから」と智が言うと刑事が確かにとうなづいた。

「では容疑者に聞きたい事とは何なのかな？」刑事の鋭い目に負けてしまいそうになるも震えながら言った。「あなたが本当に犯人なのかと、本当に誰でも良かったのかと…誰かに頼まれたのではな
いか…です。」

最後の質問は刑事も考えてもみなかった質問だった。 刑事は考
えた

「確かに誰でも良かったと言うわりには目撃者の情報では容疑者は
彼女を狙って走ってきたとの事だった。それに彼女言う『彼』が気
になるな」刑事は智に質問した。

「その藍那さんの言う『彼』とは誰か解るかな？」

「解りません、藍那自信も覚えてないみたいで」

刑事はずっと下向き返事が無かった。智は自分の力では無理だった
と落ち込んでいた。すると刑事は顔をあげ智に話し掛け始めた。

「私はね智さん、ただ『彼』と言う言葉だけで今の容疑者を犯人で
はないとは言えないし、7年前の彼が犯人とも言えないよ。でも確
かに私も容疑者の言う『誰でも良かった』は納得が出来ないんだよ。」

智は刑事を見つめていた。刑事は手を鼻の部分に持っていき悩んで
いるようだ。そしてすっと立上がり智に言った。

「とりあえず容疑者に共犯者がいないかと20歳代の男性を知らな
いか調べてみよう。」

智は解ってくれた事が嬉しく刑事に感謝した。

「ありがとうございます。宜しく願います。」

「こちらこそわざわざ知らせてくれて助かったよ。」と先程の優し
い笑顔に戻った刑事がそこにいた。

その頃藍那は7年前の時代にまだいた。

藍那はここ2、3日宏と過ごしている中で宏を思い出す事が出来て幸せな毎日を送っていた。そして今日が宏の退院の日である。

「やっぱりこれは夢じゃないのかな？だって現実ならあたしが先に退院だし…」と考えているとノックする音が聞こえた。

「はい。」

藍那が返事をするといつもならジャージ姿の部屋着で来るのに今日は退院する日であるため、ジーンズにグレーのTシャツとシックに決めた姿の宏が入って来た。

「今日の調子はどう？」

「今日は平気、退院おめでとう。」笑顔で言うと宏が少し申し訳そうな顔をした。その顔を見た時、

「あれ今の顔見覚えがある…」と思っていると宏が、

「調子が良いなら少し散歩に行かないか？」と車椅子を持って来たため一緒に中庭に行った。

中庭で他愛の無い話しをしていると藍那はじよじよに淋しさが込み上げてきて涙を流して泣いてしまっていた。

「もう会えなくなってしまう。過去に来てしまった事で悩んでいたけど、ここで彼に会えた事だけはなによりも感謝していたのに」そう思いながら泣いているといきなり両手を握られた。

「そう泣くなよ。これで会えなくなるわけじゃないんだから。」その言葉は聞き覚えがある言葉だった。

「俺は今日で退院するけどまたお前が元気になったら会いに行くから」
藍那は混乱していた。宏の言う言葉は全てに聞き覚えがあり、初めて言われた気がしないのだ。混乱していると宏が藍那の手に小さめのノートを渡した。

「お前が元気になるまではこのノートで交換日記をしよう。お互い書いたら封筒にノートを入れて送り合おう。」藍那は涙をながしながらうなづいていた。

「じゃあ俺そろそろ行くわ。またな」そういうと宏は去っていった。藍那はノートをみながら全てを思いだし涙が止まらなくなってい

た。

「そうよ。このノート見覚えある。彼の一言一言をあたしの心は覚えていた。あたしの過去の記憶なんかより今いるこの過去の現在が真実なんだわ。」藍那は涙が止まらなかった、彼を待ち続けた7年 hadn't だったのか、覚えていれば会いに行けてこんな思いはしなかった。するとふと藍那は気付いた

「あたしなんで記憶が消えたんだろう…」そう思った途端いきなり凄い頭痛に教われ心臓も痛みだし藍那は倒れてしまい、気をうしなつた。

「う…ん」藍那は体特に背中 of 痛みで目がさめた。いろいろな線が体に繋がれている。

「ここは…」

そう藍那が呟いたとき、

「藍那……………」

と叫び声が聞こえて見ると母親が藍那を見ていた。藍那の母親は藍那に抱き付くと抱き締めて泣きわめいた。

「私……………現代にかえたんだ……………」

藍那は18歳の今の時代に帰ってきたのだった。

真実（後書き）

今は書いてて楽しかったです。どうか感想お願いします。

パズル

その頃智は容疑者をガラス越しに見ていた。容疑者側からは何も見えていない。その時刑事が容疑者のいる部屋に入ってきて取り調べが始まった。

刑事は容疑者の座る向かい側に座り容疑者を見つめながら話しを始めた。

「聞きたい事が幾つかあるんだか答えてもらえるかな。」

刑事の話し方は先程智と話していた時と同じ笑顔で優しい話し方をしていた。

「はい……………」容疑者は肩を縮めて怯えながら返事をしている。智はあんな普通に優しそうな方が本当に藍那を刺したのかと驚いていた。

「では最初に君の名前、そして本当に君が藍那を刺したのかとその動機をもう一度言ってもらおうか。」

刑事にそう言われると何度同じ事を言ったのか、容疑者は淡々と話し始めた。

「名前は国と言います。あの日…お金が無くて…これからどうするべきなのか悩んでいました。すると回りの人達がだんだん妬ましくなってきた…なんで俺だけがこんな思いをつて…………みんなが帰る場所があるのが羨ましくなって…つい目の前にいる藍那さんを目掛けてナイフを刺しました…………本当に誰でも…良かったんです。」

震えながら容疑者国は話し終えた。すると刑事は、

「では、そのナイフは何処で手に入れたのかな？」

国は黙った。そして小さな声で、

「明日から食べるものもないし、食べられる草とかを切って食べようと思ひまして近くの百円均一で買いました…。」

確かに藍那さんが刺された現場の近くには小さな百円均一がありそこにそのナイフは売られていた。しかし百円均一の店員はそのナ

イフを国が買いにきた姿を覚えていないという。

「本当に妬みから誰でも良くて刺したのかな？」

刑事そう言われると国はびくつと驚いていた。

「はい……」

刑事は国がびくついた姿を見逃してはおらず質問を続けた。

「君は誰でも良かったのではなくて彼女を狙っていたのではないかね？」 国が戸惑い、体を震わせながら黙っている。

刑事は続けて、 「君は彼女を狙っていた。町の人達が藍那さんを目掛けて走る君をみているんだよ。そしてなぜ、藍那さんを刺したのか……」

「私は刺せれば誰でも良かったんです、彼女じゃなければならなかった理由なんてありません。」

国が立上がり焦りながら訴えた。その姿をみて刑事は国が何かを隠しているように思えた。

「あなたは、20歳代の男性に知り合いますか。」

国がびくつと体を動かした。

「あなたは誰かに彼女を刺して欲しいと依頼されたのではないですか。」 刑事がそう言い放つと国は体を震わせながら無言で座り続けていた。

「私は……」 国が話し始めた。

「私は……人に頼まれて……藍那さんを刺しました……お金をくれると言うのでその……お金に目が眩んで……… すいませんでした。」

国は泣きながら訴えた。

刑事もまさか本当に依頼で刺したとは思っていなかったために驚いた。 「では犯人は20代の男性だったのかな」

刑事の質問に国は繰り返した。

「いいえ、20代後半位の女性に頼まれました。名前は知りません。」

刑事も智も驚いた。

「女………どういことよ。」智は戸惑いを隠せなかった。

その頃藍那は自分が参加出来なかった卒業式の賞状をじつと見つめていた。

藍那が倒れてから目覚めるまでに四日という月日が流れていた。そして藍那はまだ刺されたあの瞬間を思い出す事が出来ずにいた。すると母が病室に入ってきた。

綺麗なお花を飾っている。

藍那は母に確かめたいことがあった。

「お母さん……」

「なあに？」母は笑顔でこちら見つめてきた。

「私昔心臓悪くて入院してたでしょ、その時知り合った彼の事なんだけど……覚えてる？」

「覚えているわよ、あなたがいつも話してた子の事でしょ、お母さんは会った事無いけど。」

「私その時の事ずっと忘れてたでしょ、どうして私その頃の記憶があまりないの？」

母は私の横に座り話してくれた。

「藍那は心臓がずっと悪くて入院してたでしょ、看護師さんが教えてくれたんだけどね、藍那がずっと仲良くしてた男の子の退院の日には藍那はいきなり倒れたのよ」

藍那はその痛みで現代に戻れた事を思い出した。

「その後からね、藍那の心臓はどんどん悪化して血液をうまく体に循環出来なくなってきていてね一刻も早く心臓移植が必要になってきたのよ。」藍那は確かに心臓移植をしていた。だから今元気でいれるのだ。しかし藍那には疑問があった。

「でも私彼とノートを送り合う約束をしたよ。そのノートは？」

母は驚いていた。「藍那あなた…記憶が戻ったの…思いだしたの…。」
「少しだけだよ、そのノートはまだある？見たいの。」母は藍那になんで今までノートを渡さなかったのかを話し始めた。

「藍那はね移植の適合者を待っている間にね、脳に負担がかかってね、記憶があいまいになっていったのよ。だからそのノートに書かれている内容もじょじょに読みづらくなってきていて、藍那は記憶がうすれている事も忘れてるからノートをを見せてショックを与えたくなかったのよ、ごめんね。」藍那は母の優しさにさつきまでなんでノートを隠していたのかなど少しの怒りもあつたが薄れていった。

「良いよ、ありがとうお母さん。」

次の日母はノートを持って来てくれた。そのノートを見ると徐々に薄れていく記憶を宏にぶつけていた。『どうかこの記憶が無くなる前にもう一度あなたに会いたい』

この文章をみて藍那は涙が止まらなくなった。

「宏に会いたい…今何処にいるの…宏にはどうしたら会えるの…現代の宏は今何処にいるの…」

ノートの次のページをみた。そこには宏の書いた字があつた。

『俺は今アメリカのロスにいます。とても景色が綺麗だよ藍那早く元気になって、一緒に行こうな。』

その後藍那はもう字が書けなくなつたようでそこで交換ノートは終わっていた。

「私がこのノートを止めてしまったんだわ…」

藍那は手掛かりの無いノートを抱き締め泣いていた。

その時智が部屋に入つて来た。刑事と一緒に…。

「智…どうしたの…。」

智は泣いてはいるがベッドに座っている藍那を見て涙を流しながら藍那を抱き締めた。

「馬鹿… どれだけ心配したと思ってんのよ…… 良かった……。元気になって。」

藍那は智を抱き締めた。

「ごめんね心配かけて。ありがとう」 すると藍那はひとりの刑事に気がついた。

刑事は笑顔で藍那を見つめて話し始めた。

「始めまして藍那さん。元気になられてほっとしたよ。少し質問があるんだけど、聞いて貰えるかなあ。」

刑事は藍那に話しかけるとベッドの近くにやって来た。

「はい……。」

藍那は刑事を見つめた。

『ねえ宏。私達はたった四日間しか一緒にいることが出来なかったけど、その四日間は今までで一番幸せな時だったよね……。あなたのいない今はなんだか満たされない思いでいっぱいなの。』

ねえ宏。……今、… 何処にいるの。』

パズル（後書き）

どうかこれからもみてくださいな。お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6342d/>

記憶のカケラ～過去・現在真実はどちらなのか～

2010年10月10日15時13分発行